

人間の時間意識

- 生物学的観点から見た問題点 -

[自発展開型]

森勇貴（経済学部 4 年）

指導教員：光田達矢

現代の我々の生活では、毎日の時間的体験が自然の生物的なリズムとますます合わなくなり、機械的な仕事や、都会や、時計と言った、複雑で合理的な秩序に従わされる社会に生きている。そんな、現代の時間感覚に対し、「なぜ時間に縛られる生活を余儀なくされるようになったのか、そして、時間と上手く付き合いながら生きていくにはどうしたらいいのだろうか」という問いを出発点として研究を行った。

まず、2 章では時間に関する人々の時間意識の歴史的な流れを社会科学的に整理することで現代社会が時間に支配されるようになった理由を理解することから始める。そして、3 章ではそれを踏まえた上で現代の時間観に対して問題点を提起する学問の一つである生物学の分野に注目した。

2 章で原始の時代から現在までを振り返った結果、現代の忙しさの大きな要因は以下の三点にまとめることができる。

- 人々の時間の捉え方が循環的なものから直線的に変化してきたこと
- 時計が人々の身近なものになるにつれて、人々の日々の時間に対する意識が強くなっていったこと
- 現在では経済的な要請によって忙しいことが美德とされるようになったこと

これらを踏まえて、3 章では生物学的視点からみた現代の時間観に対する批判を二点挙げる。

一点目は、時間観のパラダイム変換の必要性である。ここでは、直線的な考え方だけではなく、終わりや質的な時間を含めた生物学的な時間観を提唱する。成長、進化といったものに陰りが見えてきた現代では、多方面にわたる新しい時間軸を持って世の中を見つめる必要があるのではないだろうか。

二点目は、時間生物学から明らかになる、生物としてのヒトと現代の環境との不一致である。時間生物学では各生物固有の内的リズムと自然リズムとの不一致を明らかにし、自然リズムに合わせたライフスタイルの大切さを主張している。しかし、現段階での生物学的な主張では、他の生物には見られないヒ

ト固有のリズムを整える社会的因子や、ヒトの意識によって体内リズムを望む位相に変えることが出来る可能性があることが十分検討されていない段階である。今後、時間生物学と社会科学がより近い次元で結び付いて発展することを期待してやまない。